

新入生の福祉職のイメージとその要因

Studies on Conceptions of University Students Regarding Welfare Service Work

坂井圭介 坂野悦子 河野理恵

(Sakai Keisuke Sakano Etsuko Kawano Rie)

Abstract :

The purpose of this study is to explore the images and conceptions university students have about welfare service work. Self-administered questionnaires were distributed to 137 university students in 2007. Forty-eight adjective scales from the Semantic Differential Technique were utilized to analyze the data. After factor analysis, the forty-eight scales were divided into three dimensions:

① activity image ② evaluation image ③ image of difficulty

In regards to the dimensions of "activity image" and "evaluation image", students tended to have a positive image. The outcome was as follows;

1. Students who had prior interest in welfare before entering high school have a positive image.
2. Prior opportunities of contact with welfare issues had no effect on the occupation image.
3. Positive "activity image" of students showed some correlation to students with a positive image of university.

キーワード：社会福祉従事者、職業イメージ、大学生

Key Word : welfare service worker, occupation image, university student

I. 緒言

1. 社会福祉従事者の動向

我が国の社会福祉事業に従事する職員は、ゴールドプランに代表される近年の社会福祉施策拡充に伴って着実に増加している。その数は平成15年10月には154万人に及び、7割以上が社会福祉施設に従事している⁽¹⁾。社会福祉への国民的関心の高まりと共に福祉・介護サービスへのニーズが増大しており、対象者の援助には、より複雑で専門的な技術が必要とされ、量的にも質的にもこれにともなった職員の配置が要請されている状況にある。一方、少子高齢化

の進行の下での15歳から64歳までの者の減少に伴い、労働力人口も減少が見込まれている。

厚生労働省は、「社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針(平成19年8月28日厚生労働省告示第289号)」の中で、福祉サービスにおける現業の状況として、サービス量の拡大に伴う従事者数の急速な増加、非常勤職員の割合の増加、離職率の高さ、他分野と比べて従事者の給与の平均が低いことを挙げている。このような状況が近年の景気回復による他分野の採用意欲の増加といった背景とも重なって、福祉の人材難の原因となること

さかいけいすけ：人間学部人間福祉学科助教

さかのえつこ：人間学部人間福祉学科助教

かわのりえ：人間学部人間福祉学科専任講師

が懸念されている。この問題は大学等の養成校を修了したものにおいても例外ではなく、既に介護福祉士や社会福祉士、ホームヘルパー等の資格を有していながら、実際に福祉・介護サービス分野に就業していない「潜在的有資格者」が多数存在している⁽²⁾。今後さらに拡大する福祉・介護ニーズに対応するために、高い資質を持った人材が安定的に確保されることは国民生活に関わる課題であると言える。労働環境の改善が推進されることはもちろんながら、大学等の社会福祉従事者養成施設においては、福祉・介護サービスの仕事が少子高齢化社会を支える働きがいのある職業として認知され、修了生その他分野への流出を防ぎながら福祉人材の確保を図ることが必要であると考えられる。

2. 先行研究

社会福祉士養成校に入学した学生の多くは、対人援助職を中心とした福祉サービス従事者になることを入学動機としていると考えられるが、先に述べたように他分野への就職をする修了生も少なくない。入学した学生が学科を選択した理由や社会福祉従事者に対して持っているイメージを明らかにすることは、福祉職への就職意欲を高める教育の方向性を探る上でも有用であると考えられる。

大学生を対象に福祉に関連するイメージを検討した最近の先行研究としては、保阪らによる大学生の老人イメージ⁽³⁾のように、SD法を使って福祉サービス利用者に対する意識やイメージを検討したものがあつた。また、学生の職業イメージに関する先行研究として、高田らは職業イメージの研究において、学生が職業を評価する基準には、収入や学歴や責任が強く要求される「高地位性」、仕事のやり方を自分で決められるかに関わる「自立性」、技能や労働を必要とする「技術性」という三つの基準があるということを示している。高田らが検討した職業の中には福祉職は含まれていなかったが、看護師について、「技術性」の高さが強く評価に結びつく職業であることが示されていた⁽⁴⁾。他にも大倉らによる新任保健師の職業選択動機と保健師像に関する研究⁽⁵⁾や、岡本らの看護職イメージの

形成⁽⁶⁾のように看護学生の看護職に対するイメージを検討したものなど、最近の研究の中にも学生の職業イメージに関する知見は比較的多く存在した。しかしながら社会福祉従事者に対する学生のイメージを論述した研究は多くなく、わずかに以下のようなものが散見出来た。

松本らは看護学部・社会福祉学部の学生を対象として看護・福祉職のイメージについての学部間の検討を行っているが、社会福祉学科の学生は看護学部の学生と比べて、福祉の仕事に対して「清く正しい」や「献身的」、「倫理的」のようなイメージを持っていること、また「奉仕の精神」や「対象者理解」が、仕事をしていく中で重要だと思っていることが研究結果から示唆されていた⁽⁷⁾。市川らは介護福祉士資格取得コースを選択した学生の持つ介護福祉士のイメージが、温かくポジティブであると述べている⁽⁸⁾。以上のような先行研究を踏まえると、学生の仕事に対するイメージはいくつかの側面から形成されていること、福祉を志望する学生の社会福祉従事者へのイメージは高いことが推測された。

3. 研究の目的

福祉人材の育成を考える上では、福祉を学ぶ人の福祉分野への就労意向と社会福祉の従事職員に対する職業イメージを検討し、イメージや就職意向が教育プログラムの中でどのように変化するのか追跡する必要があると考えられる。本研究は、福祉を学ぶ人々の中でも社会福祉士養成校に入学した学生が社会福祉従事者について抱いているイメージの構造を明らかにし、またそれがいかなる要因によって規定されているのかを明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査方法

本研究は、2007年4月に目白大学人間学部人間福祉学科（以下、本学科という）に入学した新入生を対象に、自記式質問紙調査法を用いて調査を実施した。新入生への学科オリエンテーション時に、口頭と調査票表紙で、匿名性の保障、機密保持の保障、不利益を被らないことの

保障について説明した上で調査票を配票した。調査票にはその場で記述してもらい、回収を行った。調査対象となった新入生は142名おり、そのうちオリエンテーションに参加していた137名から回答が得られた。

2. 調査表項目

1) 調査票の内容

本研究の分析に使用した質問項目は、「新入生の福祉へのイメージ調査」と題して行った調査票の一部である。基本的属性として、年齢、性別に加え、学科に入学した理由、福祉を学ぼうと思いだめた時期について尋ねた。また福祉の知識に関して、福祉施設の種類と仕事の種類について知っているかどうかを尋ねた。これまで福祉職との接触に関する質問として、福祉職に就いている知人の有無や、サービスを利用している知人の有無、ボランティア体験や福祉施設見学の有無を尋ねた。さらに本学科に入学できたことに対する満足感と、これからの学びに対する不安感を尋ねる質問、社会福祉従事職へのイメージを尋ねる質問から成る。

2) 職業イメージ

本研究は、本学科に入学した大学生が社会福祉従事職についてどのようなイメージを抱いているのかを明らかにすることを目的としている。イメージを捉えるにあたってはSemantic Differential (以下SD法という) を用い、調査・評価を行うこととした。SD法は、C. Osgood⁽⁹⁾ (1956) が開発した事象の一般的な意味次元を量るための測定法で、心理学的な実験でよく用いられる。「好き-嫌い」などの反対語の対からなる評価尺度を複数用いて対象の評価を行う。イメージを尋ねる項目として、職業イメージを検討する先行研究⁽⁴⁾ において示された3つの側面を参考に、職業の「高地位性」、「自立性」、「技術性」に関すると思われる48対の相反する言葉を、独自に作成した。調査対象者が思い浮かべる福祉職について、48項目の対語をそれぞれ左右の極に配置し、リッカート尺度を用いて数値化し回答させた。その際、中央の数字やどちらともいえないという回答が頻発するのを避

けるため、選択させる数値を1から4までの4段階とし、各段階に「非常に」や「やや」など言葉は付さなかった。

3. 分析方法

福祉職のイメージを尋ねる質問項目群に対し、探索的因子分析を行い、因子の抽出と尺度としての妥当性を求めた。各質問項目の1から4の選択肢をそのまま1点から4点として得点化して因子分析を行った。また抽出された因子について得点化を行い、基本的属性と入学に関する質問、福祉の体験に関する質問、福祉との接触に関する質問の回答による、平均値の差を分析した。また最後に入学に対する満足感との因子の関連を検討した。これらの分析にはSPSS12.0Jを用いた。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の基本属性

対象者の性別については、男性が58人(42.3%)、女性が79人(57.7%)であった。平均年齢は18.10歳(SD = 0.37)であった。新入生に対して学科の諸説明を行うオリエンテーション時に調査票を配布したため、回収率及び有効回答率は100%であった。

福祉を学ぼうと思いだめた時期については、「中学校入学以前」が4人(2.9%)、「中学校在籍中」が31人(22.6%)、「高校在籍中」が58人(42.3%)、「高校の進路選択時期」が28人(20.4%)、「高校卒業後」が11人(8.0%)、「その他」が5人(3.6%)であった。学科に入学した理由については、「資格取得のため」に当てはまると答えた人が95名(69.3%)、「教員免許取得のため」が3人(2.2%)、「福祉職への就職のため」が93人(67.9%)、「学位取得のため」が15人(11.0%)であった。これからの勉強についての不安を尋ねた質問については「とてもそう思う」が19人(13.9%)、「そう思う」が78人(56.9%)、「あまり思わない」が29人(21.2%)、「全く思わない」が11人(8.0%)であった。将来、福祉の仕事に就きたいかどうか尋ねた質問に対しては、「とてもそう思う」が57人(41.6%)、「そう思う」が64人(46.7%)、「あまり思

わない」が15人(10.9%)、「全く思わない」が1人(0.7%)であった。学生の学科に対する満足度を「あなたはこの学科に入学したことについて、満足していますか」と尋ねたところ、「とてもそう思う」と答えたものが41人(29.9%)、「そう思う」と答えたものが81人(59.1%)、「あまりそう思わない」と答えたものが14人(10.2%)、「全くそう思わない」と答えたものはいなかった(table-1)。

2. 福祉職のイメージ

48項目の福祉職へのイメージをより総合的に捉えるために因子分析を行い、因子の抽出を試みた。因子分析を行う前に各項目の得点分布を確認し、分布が高い方(mean + SD > 4.2)も

しくは低い方に(mean + SD < 0.8)歪んでいる項目を分析から取り除いた。取り除かれた項目は8項目であった。表される下位尺度間に相関を仮定し、因子分析の回転には社交回転(プロマックス回転)を用いた。下位尺度には評価(evaluation)、力量(potency)、活動性(activity)に関する因子が現わされると仮定し、因子数を3と決め分析を進めた。共通性が低い項目(0.16以下)、またはどの因子に対しても因子負荷量が低い項目(0.30以下)を除きながら、分析を進めた。最終的に、因子分析を行った40の質問項目中、18項目が削除され、残った22項目によって3つの下位尺度で構成される内的構造が説明された。「29. 無口な-おしゃべりな」、「10. 地味な-派手な」、「11. 安定した-不安定

table-1 調査対象者の属性と入学に関する項目

| | 項目 | 人数 | % |
|---------------------|------------|----|-------|
| 性別 | 男性 | 58 | 42.34 |
| | 女性 | 79 | 57.66 |
| 福祉学科への入学を希望した理由 | 資格 | 95 | 69.34 |
| | 教員免許取得 | 3 | 2.19 |
| | 就職 | 93 | 67.88 |
| | 学位 | 15 | 10.95 |
| 福祉を学ぼうと思いだめた時期 | 中学校入学以前 | 4 | 2.92 |
| | 中学校在籍中 | 31 | 22.63 |
| | 高校在籍中 | 58 | 42.34 |
| | 高校の進路選択時期 | 28 | 20.44 |
| | 高校卒業後 | 11 | 8.03 |
| | その他 | 5 | 3.65 |
| 福祉の仕事への就職意向 | とてもそう思う | 57 | 41.61 |
| | そう思う | 64 | 46.72 |
| | あまり思わない | 15 | 10.95 |
| | 全く思わない | 1 | 0.73 |
| 福祉を勉強することに不安があるか | とてもそう思う | 19 | 13.9 |
| | そう思う | 78 | 56.9 |
| | あまりそう思わない | 29 | 21.2 |
| | まったくそう思わない | 11 | 8.0 |
| この学科に入学したことに満足しているか | とてもそう思う | 41 | 29.9 |
| | そう思う | 81 | 59.1 |
| | あまりそう思わない | 14 | 10.2 |
| | まったくそう思わない | 0 | 0.0 |

な」の3つの項目は、因子内での負荷の方向をそろえるため、配点を反対にした。分析後の因子パターン行列を表に示した。(table-2)

第Ⅰ因子には「24. 元気のある-元気のない」、「37. 健康的な-不健康的な」、「32. 面白い-つまらない」、「29. おしゃべりな-無口な」、「7. 明るい-暗い」、「3. 親しみやすい-親しみにくい」、「26. 話しやすい-話しにくい」、「38. 若々しい-年寄り臭い」、「20. 未来がある-未来がない」という9つの対が集まりを持って現れた。これらは福祉職として働く人に接したときに感じる印象や性格を形容する語句と考えられるし、またその人の活発性に関する項目群とも考えられるため、「活動性イメージ」と名付けた。また第Ⅱ因子は、「36. カッコいい-カッコわるい」、「28. 尊敬される-尊敬されない」、「39. 地位が高い-地位が低い」、「23. 立派な-みすぼらしい」、「8. 強い-弱い」、「10. 派手な-地味な」という項目で成り立っていた。これらは人の性格の傾向を現わすと言うよりは、職業名を聞いたときに思い起こされるようなイメージであり、職業が社会的に受けている評価についてどのように感じているかを尋ねている項目群と考えられる。そのため、これを「評価イメージ」と名付けた。最後の第Ⅲ因子は「42. 休みが少ない-休みが多い」、「40. 苦勞が多い-苦勞が少ない」、「9. 繊細な-大胆な」、「45. 道徳的な-非道徳的な」、「30. ストレスの多い-ストレスの少ない」、「34. 残業が多い-残業の少ない」、「11. 不安定な-安定した」で構成されていた。これらは自分が業務を行う事を想像し、その難しさや、職業に従事することで受ける負担の度合いを示している項目群と考え、「職業難易度イメージ」と名付けた。表された3つの因子の因子間相関を測定したところ、「活動性イメージ」と「評価イメージ」の間は、0.399、「活動性イメージ」と「職業難易度イメージ」の間では-0.084、「評価イメージ」と「職業難易度イメージ」の間では-0.225であり、「活動性イメージ」と「評価イメージ」の間で比較的強い正の相関が見られた。

表わされた3つの因子を、各質問項目得点の単純加算より尺度得点化をおこなったが、その際、値が大きいほど評価が高いことを表わすよ

うに、各質問項目の回答について1が4点、4が1点というように、配点を逆にして加算した。また加算された得点を因子を構成している項目数で割って値の大きさをそろえた。第Ⅰ因子と第Ⅱ因子はその値の高さより活動性や評価が高いというイメージを持っていることを表わし、第Ⅲ因子はその値が大きさが、職業難易度が高いというイメージを持っていることを表わしている。尺度としての信頼性を検討するため、クロンバック α 係数を求めたところ、第Ⅰ因子は0.779、第Ⅱ因子は0.691、第Ⅲ因子は0.614という値を示した。各因子の得点について、全体の平均値を求めたところ、第Ⅰ因子は3.086、第Ⅱ因子は2.746、第Ⅲ因子は3.372となった。

3. 福祉職のイメージへの要因分析

1) 属性及び福祉を学ぼうとした時期

調査対象の性別、福祉を学ぼうと思い始めた時期について、各因子得点の平均値の差を、 t 検定を行い分析した (table-3)。福祉を学ぼうと思い始めた時期については、中学校卒業以前と高校入学以後の2群に分けて検討を行った。性別の分析では、女性の方が「活動性イメージ」「職業難易度イメージ」の平均値が有意に高かった ($p < 0.05$)。福祉を学ぼうと思い始めた時期については、中学校卒業以前に福祉を学ぼうと思い始めた学生の方が「活動性イメージ」が高く表わされた ($p < 0.05$)。

2) 福祉の知識

福祉の知識に関して尋ねるため、「どのような種類の福祉施設があるかあなたは知っていますか」、「どのような種類の福祉の仕事があるのか知っていますか」という質問項目により、福祉施設および福祉職の種類を推量することとした。その結果、回答の分布に差があったため、「よく知っている」、「まあまあ知っている」と答えたものを「知っている」群、「あまり知らない」、「全く知らない」と答えたものを「知らない」群として再カテゴリー化を行い、群間の平均の分析を行った (table-3)。どちらの質問についても、「知っている」と答えた群の方

table-2 福祉職イメージの因子分析

| | I 因子 | II 因子 | III 因子 |
|----------------------------------|--------|--------|--------|
| I 活動性イメージ ($\alpha=0.779$) | | | |
| 24. 元気のない - 元気のある | 0.654 | -0.013 | 0.180 |
| 37. 不健康な - 健康的な | 0.620 | -0.104 | -0.174 |
| 32. つまらない - 面白い | 0.569 | 0.068 | 0.068 |
| 29. 無口な - おしゃべりな | 0.560 | 0.212 | -0.091 |
| 7. 暗い - 明るい | 0.557 | 0.140 | -0.107 |
| 3. 親しみにくい - 親しみやすい | 0.522 | -0.082 | -0.203 |
| 26. 話しにくい - 話しやすい | 0.507 | -0.017 | 0.005 |
| 38. 年寄り臭い - 若々しい | 0.470 | 0.087 | -0.124 |
| 20. 未来がない - 未来がある | 0.390 | 0.157 | 0.115 |
| II 評価イメージ ($\alpha=0.691$) | | | |
| 36. カッコわるい - カッコいい | 0.058 | 0.647 | 0.036 |
| 28. 尊敬されない - 尊敬される | -0.200 | 0.572 | 0.119 |
| 39. 地位が低い - 地位が高い | -0.049 | 0.535 | -0.155 |
| 23. みすぼらしい - 立派な | 0.109 | 0.518 | 0.037 |
| 8. 弱い - 強い | 0.325 | 0.436 | 0.090 |
| 10. 地味な - 派手な | -0.010 | 0.345 | 0.294 |
| III 業務難易度イメージ ($\alpha=0.614$) | | | |
| 42. 休みが多い - 休みが少ない | -0.114 | 0.207 | 0.573 |
| 40. 苦勞が少ない - 苦勞が多い | 0.078 | -0.047 | 0.505 |
| 9. 大胆な - 繊細な | 0.275 | -0.162 | 0.460 |
| 45. 非道徳的な - 道徳的な | 0.221 | 0.143 | 0.455 |
| 30. ストレスの少ない - ストレスの多い | -0.046 | -0.222 | 0.442 |
| 34. 残業の少ない - 残業が多い | -0.152 | 0.084 | 0.422 |
| 11. 安定した - 不安定な | 0.220 | 0.047 | 0.407 |

が「活動性イメージ」、「評価イメージ」が有意に高かった ($p < 0.01$)。仕事の種類については、「知っている」と答えた群の方が、「職業難易度イメージ」が高かった ($p < 0.05$)。

3) 福祉との接触

学生の福祉との接触を知るため、「家族や知り合い（普段からよく話をする人）に、福祉の仕事に就いている人はいますか」、「あなたの家族や知り合いに、福祉サービスを利用している人はいますか」、「あなたはこれまでにボランティアをしたことがありますか」、「あなたは、これまでに福祉施設の中を見学したことがありますか」という4つの質問項目を立てた。福祉職

に就いている知人及びサービス利用者の知人については、「いる」と答えたものが3割前後いた。ボランティア及び福祉施設の見学については、「ある」と答えたものが7割以上いた。これらの質問についても、因子得点の平均値の差を検定した (table-3)。これらの質問については、どの因子も平均値の群間の差異が見られなかった。

4. 入学に対する満足度とイメージの関連

表わされた3つの因子が、学生の入学に対する満足度に影響しているのかを検討するため、満足度と各因子との相関係数を分析した。その際「全くそう思わない」と答えたものが少なか

table-3 要因分析

| 項目 | I 活動性イメージ | | | II 評価イメージ | | | III 業務難易度イメージ | | |
|------------------------|-----------|-------|------------|-----------|-------|------------|---------------|-------|----------|
| | 平均値 | 標準偏差 | t 値 | 平均値 | 標準偏差 | t 値 | 平均値 | 標準偏差 | t 値 |
| 性別 | | | | | | | | | |
| 男性 | 2.985 | 0.453 | 2.172 ** | 2.646 | 0.478 | 1.333 | 3.286 | 0.354 | 2.403 ** |
| 女性 | 3.156 | 0.421 | | 2.748 | 0.400 | | 3.432 | 0.330 | |
| 福祉を学ぼうと 思い始めた時期 | | | | | | | | | |
| 中学校卒業以前 | 3.243 | 0.439 | -2.255 ** | 2.794 | 0.383 | -1.792 | 3.282 | 0.260 | 1.803 |
| 高校入学以後 | 3.042 | 0.420 | | 2.652 | 0.426 | | 3.406 | 0.373 | |
| 福祉施設の知識 | | | | | | | | | |
| 知っている | 3.255 | 0.406 | -5.317 *** | 2.819 | 0.394 | -3.416 *** | 3.353 | 0.348 | 0.694 |
| 知らない | 2.879 | 0.393 | | 2.567 | 0.446 | | 3.395 | 0.345 | |
| 職種の知識 | | | | | | | | | |
| 知っている | 3.207 | 0.427 | -4.419 *** | 2.798 | 0.414 | -3.341 *** | 3.318 | 0.348 | 2.406 ** |
| 知らない | 2.882 | 0.390 | | 2.542 | 0.429 | | 3.464 | 0.327 | |
| 福祉の仕事に就いて いる知人の有無 | | | | | | | | | |
| いる | 3.139 | 0.436 | -1.046 | 2.656 | 0.464 | 0.948 | 3.350 | 0.397 | 0.538 |
| いない | 3.056 | 0.444 | | 2.733 | 0.418 | | 3.386 | 0.315 | |
| 福祉サービスを利用 している知人の有無 | | | | | | | | | |
| いる | 3.197 | 0.424 | -1.923 | 2.688 | 0.407 | 0.293 | 3.389 | 0.387 | -0.348 |
| いない | 3.038 | 0.442 | | 2.711 | 0.449 | | 3.365 | 0.329 | |
| ボランティア体験の 有無 | | | | | | | | | |
| ある | 3.126 | 0.458 | -1.877 | 2.707 | 0.434 | -0.087 | 3.363 | 0.348 | 0.525 |
| ない | 2.978 | 0.376 | | 2.699 | 0.445 | | 3.399 | 0.346 | |
| 福祉施設見学の有無 | | | | | | | | | |
| ある | 3.119 | 0.458 | -1.564 | 2.716 | 0.441 | -0.532 | 3.377 | 0.334 | -0.244 |
| ない | 2.993 | 0.381 | | 2.671 | 0.425 | | 3.359 | 0.383 | |

p<0.05 *p<0.01

ったため、「あまりそう思わない」に含めて分析した。結果、第I因子である「活動性イメージ」のみに有意な相関が確認された ($r = 0.447$)。

さらに他の変数の影響もコントロールしながら因子の影響を検討するため、入学に対する満足度を従属変数として重回帰分析を行った。独立変数としては「活動性イメージ」の他に、性別、入学した時期、福祉施設および福祉職の種類の認知度、福祉職に就いている知人の有無、福祉サービスを利用している知人の有無、ボランティア経験の有無、施設見学の有無、福祉職への就職意向、勉強に対する不安、及び「評価イメージ」、「業務難易度イメージ」を投入した。独立変数の投入にはステップワイズ法を用いた。モデルの有効性を示すための分散分析の結果では $F = 15.731$, $df = (3,117)$, ($p < 0.001$) で帰無仮説を棄却し、回帰式の有意性が認められた。重回帰分析の結果、「活動性イメージ」、福祉職への就職意向、性別が影響を与えていることが示され ($p < 0.01$) その他の独立変数については除外された。表わされたモデルの重決定係数は0.269であった (table-4)。

table-4 入学への満足度についての重回帰分析

| 入学への満足度 | | | |
|------------------------|---------|--------------|-----|
| | β | t | |
| 活動性イメージ | 0.376 | 4.609 | *** |
| 福祉の仕事への就職意欲 | 0.307 | 3.808 | *** |
| 性別 | -0.217 | -2.715 | *** |
| R ² = 0.269 | | df = (3,117) | |
| F = 15.731 | | p < 0.001 | |

*** $p < 0.01$

IV. 考察

1. 福祉職のイメージ

イメージという心理的・主観的なものを測定する場合、社会的に望ましいとされる回答に偏る傾向がある。本研究においてはこの偏りの強さを考慮していないため、また対象となる学生にオリエンテーションの場を利用して調査が行

われたこともあり、福祉を学ぶ学生として望ましい答えの方に回答が偏っている可能性が否定出来ない。特にポジティブなイメージについては、結果を幾分割り引いて考察する必要があると考えられる。

因子分析の結果より、本学科の新入生の持つ福祉職へのイメージには、「活動性イメージ」、「評価イメージ」、「職業難易度イメージ」という3つの次元があることが明らかとなった。「活動性イメージ」および「評価イメージ」はその得点の高さによって、前者は働く人の性格や活発さのイメージが高いこと、後者は社会的に評価が高いというイメージを受けていることを意味している。つまり、これらの値の高さはポジティブな意味合いを持つとすることができる。活動性とは、実際の人間の行動に関するものであるので、学生が実際に実習などで福祉施設の職員等と関わることや仕事の内容を学ぶことで、大きく変化し得ることが考えられる。一方、「評価イメージ」は、社会福祉従事職が社会から受けている評価をどう捉えているかによって決まるため、自身の学習により社会福祉従事職への認識が変わったとしても、影響を受けにくい可能性があるかと推測できる。

「職業難易度イメージ」は得点の高さによって、業務の難しさや受ける負担が低いことを意味している。この因子には「休みが少ない」や、「残業が多い」という項目も含まれるため、どちらかといえば値の高さが本人にとってネガティブな意味合いを持つと考えられる。しかしながら、仕事を難しいと捉えることが学習の意欲や仕事の使命感へと繋がる可能性も考えられるため、このイメージが必ずしも悪いイメージであるとは言い切れない。むしろ社会福祉士が持つべき高い倫理性を考えれば、このイメージが低く福祉という仕事を簡単であると捉えている方が、学習の段階で意欲をなくしたり、就職しても離職意向が強くなるという可能性がある。

各因子の全体的な平均点から、学生は福祉職について活動的な仕事であり社会的にも高い評価を受けているというイメージを持ちながらも、業務については難しさを感じ、従事した場合の負担度が大きいと考えていることが示唆さ

れた。肯定的なイメージと、否定的なイメージが同時に示されていると言えるが、このことは学生が、福祉の仕事に興味を持ち、やりがいや魅力を感じると同時に、労働環境の過酷さや待遇の低さに関する認識も持っていることを示唆している。

2. イメージへの要因分析

因子分析によって表わされた各因子は、信頼性係数の分析によりいずれの因子についても十分な内的整合性をもっていることが示されたため、尺度としてその後の分析に使用し得ると考えた。基本的属性と各因子のt検定の結果から、女性の方が「活動性イメージ」及び「職業難易度イメージ」が高いことが示された。学生がそれぞれどの福祉職について連想しているのかは不明だが、介護職のような仕事を考えていた場合、女性の方が体力的な負担が大きいと感じるのではないかと考えられる。また、福祉を学ぼうと思いだめた時期についても「活動性イメージ」に影響があった。早い段階から福祉を目指していた学生の方が、それだけ仕事に対しての思いが強く、職員への評価が高いと考えるのが妥当であるが、この結果はそれを裏付けるものとなった。福祉の知識と因子の関係については、施設や職種を知っている方が、「活動性イメージ」、「評価イメージ」が高く、さらに職種を知っている方が「職業難易度イメージ」も高かった。入学してくる学生の中でもこれまでの体験やメディア等から受けている情報の度合いによって知識に差があることが推測されるが、そういった知識が学習前の職業イメージにポジティブな影響を与えていると推察できる。また現実的に福祉の仕事の中には、利用者との関わりの中で困難な場面があり、解決の難しい問題も存在する。すでに仕事について何らかの情報を得ている学生の方が、そのような仕事の困難な場面の存在についても認識があり、より現実的なイメージを持っていると考えられる。また、この結果から入学時に福祉職に対するイメージが低い学生であっても養成課程における知識の増加に伴って、イメージが向上することが考えられる。

学生が持つ福祉のイメージは、これまでの福祉職やサービス利用者との接触体験から形成されると考え、福祉職に就いている知人の有無や、サービス利用者の有無、ボランティア体験や福祉施設見学の有無によるt検定を行った。しかしながら、これらの質問と各因子の関係は認められなかった。このことから学生の福祉との接触が与える影響は人によって様々であり、接触度合いが高いからといって一概に福祉職へのイメージが良くなるとはいえないことが明らかとなった。しかし、これらの体験が入学の動機と成っている可能性については否定できない。

3. 入学満足度についての重回帰分析

入学したことについての満足度は、社会的な望ましさによる回答の偏りは考えられるが、ほとんどの学生は入学出来たことに対しておおむね満足していると考えられた。入学したことに対する満足度を従属変数とした重回帰分析の結果から、福祉職イメージの因子の中でも、「活動性イメージ」と福祉職への就職意向が高いこと、また女性であることが入学満足度の高さに影響を与えていることが確認された。説明率の低さから分析モデルについては懐疑的に成らざるを得ないが、就職を希望している方が大学入学の満足度が高いという妥当な結果と共に、他の変数の影響を除いても、イメージが入学満足度に影響を与えるという結果を得ることが出来た。調査は授業が始まる前に尋ねているので、大学の授業に対する満足感という意味合いは含まれていないと考えられる。

4. 総合的考察

今回の研究の目的は、本学科に入学した新入生を対象に、福祉職について社会福祉従事者について抱いているイメージの構造を明らかにし、そのイメージに影響を与える要因を明らかにすることである。調査の結果、学生は福祉の仕事について「活動性イメージ」、「評価イメージ」、「業務難易度イメージ」という3つの側面のイメージを持っていた。イメージには、性別や福祉を学ぼうとした時期、また福祉の知識によって差があることが分かった。また「活動性

イメージ」は、入学の満足度に影響を与えていた。

学生は、社会福祉士の養成課程においても社会福祉従事職についてのイメージを変化させていくと考えられる。対人援助技術の高い素質を持ったものでも、福祉の仕事に従事する意欲がなくなることがあり得るため、福祉の仕事に対する就職意欲を失わずに、仕事に対してポジティブなイメージを保たせながら教育を行うことも必要であると考えられる。入学時の段階から学生の福祉職へのイメージは高く表れており、目指す社会福祉従事者に対して高い期待を持って入学して来ていると言える。ボランティアや臨地実習の中でソーシャルワーカーとしての専門性が高く、人格的にも魅力のある指導者に出会うことがイメージ形成の向上や維持に有用であると考えられる。

一方で、福祉を学ぶことへの不安を感じている学生も相当数存在する。福祉の仕事は実際的にも困難が少ない職種であるとはいえないが、仕事を知ることが就業条件の悪さや負担度の高さのみに着目することではあってはならない。教育を行う側としては、必要によっては福祉職に対するイメージの修正を行いながら、福祉職の持つ社会的な期待度の高さや業務の専門性の高さが、学生の自己実現や使命感とつながるように援助することが必要と考えられる。しかしながらその具体的な方法については手探り状態であると言わざるを得ない。

佐藤らは、介護福祉士の離職意向には、職務において人が役割を遂行する際の、情報の矛盾による役割葛藤や、情報不足による役割曖昧性を感じる（役割ストレス）ことが影響していることを明らかにしている⁽¹⁰⁾。大学において、現場の業務を遂行するための援助技術や知識について指導することは当然ながら、職場において指示されたサービスを提供するだけの援助者ではなく、互いに必要とし合う対等な人間として利用者に関与し、社会福祉士としての役割を感じることでできる援助者を目指す必要がある。足立は、福祉サービスの関係が「してあげる・してもらう」の次元から、利用者と「共に生きる」という次元へと変換していくことが必要で

あり、福祉教育においては、臨床的な対人能力の豊かさを育む教育が求められていると述べている⁽¹¹⁾。利用者と共に生き、関わりの中に喜びを感じる力が援助者に求められており、また、このような援助者像を学生が見いだすことによって、困難を超えた就職意欲に繋がるのではないかと考える。

最後に、本研究は福祉に関する授業を受ける前の学生を対象としたものであり、今後、大学教育の中でイメージや就職意欲がどのように変化していくのか追跡調査を行うことが今後の課題として求められる。また介護福祉士の養成課程においては、実習がやりがいを低下させるという知見もある⁽¹²⁾。社会福祉士の場合、ボランティアや臨地実習等で利用者と触れ、実際に援助者の側に立つという体験が福祉職への就職意向に影響するのか検討を行う必要がある。

【引用文献】

- (1) 財団法人厚生統計協会編 国民福祉の動向・厚生指標 53 (12) 191, (2006)
- (2) 厚生労働省告示第289号 社会福祉事業に従事する者の確保を図るための措置に関する基本的な指針、P9, (2007)
- (3) 保坂久美子、袖井孝子 大学生の老人イメージ：SD法による分析 社会老年学27, 22-33 (1986)
- (4) 高田洋 職業イメージによる職業威信評定基準の分析 人文学報. 社会福祉学 18, 65-87, (2002)
- (5) 大倉美佳、佐伯和子、大野昌美、他 就業時に新任保健士が抱いている保健士像：職業選択動機と保健士像 金沢大学つるま保健学会誌 28, No.1, 143-150, (2004)
- (6) 岡本寿子、植村小夜子、村上静子 看護職イメージの形成 京都市立看護短期大学紀要、30, 75-80, (2005)
- (7) 松本浩幸、隆朋也、横川剛毅 看護職・福祉職に対する学生のイメージに関する研究 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 12, 125-134, (2004)
- (8) 市川隆一郎、藤野信行 介護福祉士をめざす学生に対する意識調査報告(第1報)―進学達成動機と介護イメージ 聖徳大学研究紀要 21, 295

- 307, (1988)
- (9) Osgood, C.E., Suci, G. J. & Tannenbaum, P. H. (1957) The measurement of meaning. University of Illinois Press, Urbana.
- (10) 佐藤ゆかり、澁谷久美、中嶋和夫、香川幸次郎 介護福祉士における離職意向と役割ストレスに関する検討 社会福祉学, 44 (1) : 67-78, (2003)
- (11) 足立叡 福祉マインドの醸成と職場教育の課題 月刊福祉 87 (8), 16-18, (2004)
- (12) 木田文子、武藤裕子 学生の介護職意識の変化：実習経験を通して 静岡福祉大学紀要 25, 9-65, (2006)